



114  
A 1953

砂糖税法新設ヲ非トスル意見書

大正十一年四月  
郵寄



頃者政府、砂糖税法制定、議ヲ傳フル者アリ曰  
ク我國、於テハ國庫、歳入ヲ増加スルノ必要ニ迫  
リ終ニ砂糖ニ對シテ三割ノ課税ヲ施サント欲スト  
是レ果シテ事實ナルヤ否ヤ若シ事實ナリトセハ  
果シテ國家ノ良計ナルヤ否ヤ吾人大ニ疑ヒナ  
キ能ハズ歐米諸國カ數年以前若シクハ十數年  
以前ヨリ製糖業ヲ保護奨励シテ砂糖税ヲ全  
廢シ又ハ刻下全廢セントシテ、アハ時ニ際シ單  
リ我國ニ於テ砂糖税新設ノ義ヲ聞ク豈ニ奇異  
ノ感ナキヲ得ンヤ茲ニ吾人ハ吾人ノ意見ヲ發表  
シテ以テ當局者ノ猛省ヲ仰キ併テ江湖憂國

ノ士ノ是正ヲ請ハント欲ス

(一)

抑モ我國ニ於ケル砂糖ノ消費高ハ人口ノ増加ト生活程度ノ昇リタルニ依テ著シク増進シ概畧一年平均貳千五百萬圓ニシテ之ヲ五年以前ニ比スレハ殆ント二倍ニ達シタリ而シテ其内内地ノ産出高ハ大略五百萬圓ニシテ残り貳千萬圓ハ實ニ在香港ノバターアイルドスワヤ、ジャーンデンコセソン兩会社及ニ独逸其他ノ諸邦ヨリ神戸横濱等ニ輸入シ来ルモノトス故ニ我國ニ於テ需用スル砂糖ノ十分ノ八ニ終テ其供給ヲ外國ニ仰キ来リシモノト謂フベシ

天六五十一平四

然ルニ昨年以來大坂及東京ニ精糖業ノ二會社起リ新タニ独逸新式ノ精巧ナル器械ヲ据付ケ大ニ輸入品ノ防禦ヲ謀リシヨリ大坂ノ日本製糖株式會社ハ一日平均八萬斤(一年平均二千九百萬斤餘)ヲ製造シ東京ノ精製糖會社ハ一日平均六萬斤(一年平均二千餘萬斤)ヲ製造シ現ニ四百萬圓ノ輸入ヲ防遏スルニ至レリ而シテ右兩会社共創立後日猶ホ浅ク工場ノ組織未タ完成セズ且ツ前者ノ株金ハ其半額ヲ松込ニシニ過キサルヲ以テ隨テ其製造高モ未タ充分ナラス若シ其組織完成シ株金全額松込済ノ曉ニ至レハ其製造高モ隨テ之ニ倍加スルニ至ランコト必セリ

斯ノ如ク目下我國ノ精糖業ハ漸ク發達進步ノ芽  
ヲ萌シ數多ノ各種類ノ精糖會社陸續相起ラント  
スル希望ヲ呈シ年來外國ニ流出セシメシ式千万  
円ノ輸入ヲ防遏シ以テ我國ノ財源ヲ増殖セントス  
ル幸運ニ際シタルニ係ハラズ茲ニ俄然砂糖税法ヲ  
設ケルトセハ其結果ハ現在ノ糖業ノ進路ヲ杜絶  
シ將ニ勃興セントスル諸製糖業ノ發達ヲ沮害ス  
ルニ至ルヤ必セリ其理由如何ト云フニ

我國ノ精製糖業者ハ明年ヨリハ三割ノ税ヲ課セラ  
ルトセハ既ニ原料ニ對シテ五分ノ海關稅ヲ払フカ  
故ニ都合三割五分ノ課稅ヲ負担セサユ一カラス之ニ  
及シ香港ノ糖業者ハ三割ノ稅(註日英條約第四

條ニ依レハ輸入糖ハ内國糖ト金額ノ稅額ヲ超過スルコ  
トヲ得サルモノナレハ内國糖ニ三割ヲ課セハ輸入糖ノ割  
合ハ輸入稅一割内國稅二割都合三割ノ稅率トナルハ  
キナリ)ヲ課セラハ、ノシナルガ故ニ彼ハ我ヨリ五分ノ  
廉價ヲ以テ優然市場ニ競争スルヲ得ルナリ故ニ必然  
ノ結果トシテ我國ノ製糖業者ハ外國人ニ壓倒サ  
ルノ已ムヲ得サルニ至ル是レ實ニ架上ノ空論ニ非ル  
ナリ

大坂ニ東京ニ現在精糖會社相起リ又將來ニ於テ各  
地ニ各種ノ會社相起ラントスル所以ノモノハ其目的  
輸入品ハ海關稅ヲ課セラレ内國品ハ無稅ナルカ故  
ニ我ハ彼ヨリ結局一割ノ廉價ヲ以テ市場ニ出ス

トヲ得ルカ故ナリ内國品ハワマリ一割ノ保護ヲ政府ニ受クルト今様ナルニ依ルナリ香港ノ糖業者ト虫又原料ヲ香港ニ於テ得ルニ非ラス矢張り臺灣若クハ南洋ノ諸島ニ仰クモノニシテ自ラ原料ヲ有セス又原料ヲ得ルニ就テ多少ノ費用ヲ費スエトハ我國ト今一ナルモ我國ニ於テ該業ノ發達セザリシハ實ニ精製ノ經驗ニ富マス精巧ナル器械ヲ有セザリシニ由ルナリ然ルニ今ヤ漸ク經驗ヲ積ミ新器械ヲ得精糖業隆盛ニ赴カントスルニ際シ一朝此保護ヲ奪ハルノシナラス却テ外國品ト比較シテ五分ノ高稅ヲ課セラレ、ノ結果ニ至ラハ此等ノ精糖業者カ當初ノ目的ヲ失フテ閉業スルニ至ルハ必然ナリ

故ニ課稅ノ結果ハ

第一、内地現存ノ糖業者ヲ撲滅シ

第二、將ニ起ラントスル精製糖業ノ發生ヲ杜絶シ

第三、終ニ永久二十万圓以上ノ輸入ヲ妨クノ期ナキニ至ラシム

是レ豈ニ國家ヲ憂慮スル者ノ精神ナランヤ

(二)

維新以來我國ノ糖業ハ素ヨリ微々トシテ振ハサリシト虫一兩年以來初メテ發達ノ兆候ヲ呈セリ是レ我國ノ為メニ最モ喜ブヘキ現象ト云ハサルヘカラズ

而カノミナラズ二十七八年彼ノ結果皇天ハ新ニ我  
國ニ砂糖國タル臺灣ヲ附與セリ抑臺灣ノ地タル熱  
帶ニ位スルヲ以テ我國ノ重要ナル富源ト為スニ足  
ルナリ往年不完全ナル支那政府ノ治下ニ在リテスラ  
年々數百萬円ノ輸出ヲ産シタルニ非スヤ之ヲ我國  
ノ規律アハ統治ノ下ニ歸シ適宜ノ良法ヲ以テ之  
ヲ啓発セハ其産額幾千万円ノ多キニ達スルヤモ計  
リ知ルハカラズ且ツヤ内地ノ精糖業漸次盛大ニ赴  
クトキハ薩摩日向琉球小笠原四國和泉駿遠  
等ノ諸國ニ産出スル原料モ今後歴然タル國庫ノ財  
源トナスコトヲ得ルナリ  
今日我國ニ砂糖税法ヲ施行スルハ第一項ニ述一タル

カ如ク砂糖業者ヲ絶滅セシムルモ以テカ故ニ取リ  
モ直ク新領土ノ富源ヲ塵芥ニ委シ幾千万円ノ産額  
ヲ闇黒中ニ埋葬スルト今時ニ我國固有ノ財源ヲモ  
放棄シ了ルト一般ナリ國家ノ經濟上政策上寧ロ斯  
如キ愚ナルモノトシヤ  
今后我國ノ糖業ニ對スル政策ハ退守消極ノ手段ニ  
非ラズシテ進取積極ノ手段ヲ是トスルキハ論ナキ  
ナリ然ルニ當局者ハ輸出者タルコトヲ勤メスレテ  
甘シシテ永ク輸入者ノ地位ニ立テ僅ニ現存スル内  
國ノ糖業者ヲ驅テ以テ外商ノ蹂躪ニ雌伏  
セシメントス是レ豈天惠ノ美島ヲ得商工業ヲ以テ  
世界ニ立ツントスル戰捷國ノ本意ナランヤ

砂糖税ノ税法ノ性質ニ背反スルモノナリ請フ之ヲ説カン

第一、抑砂糖税ハ酒料飲料若クハ烟草ノ如ク奢侈品

ニアラス亦道德上悪弊ヲ誘引スルノ恐レアルモノ

ニアラス貧富ヲ論セス老幼ヲ別タス男女ヲ問

ハス普ク日用ノ常品トシテ使用セサルハカラサル

モノナリ日用品ニ課税スルハ税法ノ性質上爰

シテ良税ト謂フハカラス

第二、税法ノ原則ハ彼ノ登録税ノ如ク又改米ノ相続税

ノ如ク富者ニ課シ貧者ニ免シ若クハ財産ノ多少

ニ依リテ其負担ノ輕重ヲ異ニスルカ如キ種類

ノ擇ブヲ可トス然ルニ砂糖税ハ此原則ヨリ推ストキ

ハ最悪種ノモノト云ハサルハカラス何トナレハ砂糖

ハ人生ノ營養上必需ノ日用品ニシテ貧富ニ依

其消費ノ量ヲ異ニスルモノニ非レバナリ

第三、税法ノ原則トシテ徵稅手續ノ最モ簡易ナルモノ

ヲ採ハサルハカラス然レトモ砂糖税ハ其徵稅ノ方法

非常ニ繁雜ニシテ困難ヲ感スルニ至ント豫想

ノ外ニ出ツキヲ信ス何ントナレハ砂糖ノ種類

數多アリテ形状ヲ一見シテ其品質ヲ識別スルハ

其道ニ通曉スルモノヲ俟タサルハカラス收稅吏

ハ如何ニシテ之ヲ鑑別セントスルカ又精製糖ト

粗製糖トニ對シテ如何ナル標準ヲ以テ課税ス

一キカ若レ原料糖ニ免稅シ精製糖ニ課税セン

トモハ、独リ外國糖業者ヲ保護シ内國糖業者ヲ  
困厄セシムルニ非ラズヤ又徵稅ノ檢査法ハ如何ニ  
ス一キカ若シ外皮ニ徵稅済ノ衡錫印符ヲ押  
捺スルトモハ、晚稅者ヲ豫防スル為メニ多數收吏  
ヲ拉シ来ルモ到底其繁雜ニ堪ユ一カラサント信ス要  
スルニ砂糖ノ徵稅ニ就テハ莫大ノ徵稅費ト多數ノ  
收稅吏ト無用ノ時間トヲ徒用シ苛酷ノ法律ノ下ニ統  
々稅法違反ノ犯罪人ヲ造出シ警察法廷ヲ賑ハシム  
ル外何ノ得ル所ナカルヘシ

第四、輸入ヲ獎勵シテ外國ノ零銀ヲ自國人ニ支払シ  
ムルノ奇結果ヲ呈スルモ、ハ砂糖稅ナリ是レ  
稅法ノ性質ニ於テ最モ忌ム一キモノトス

第五、物品引取ノ場合ニ於テ既ニ一度課稅セラレ再製ノ時  
ニ再ニ課稅セラレ結局ニ重ノ負擔ヲ業者ニ強ユル  
モノハ砂糖稅ナリ二重ノ課稅ハ稅法ノ原則ニ於テ  
最モ忌ム一キハ論ヲ俟タス

### 結論

之ヲ要スルニ砂糖稅法制定ノ一事ハ國家ノ生産力ヲ沮害  
シ外國品ノ輸入ヲ獎勵シ豊富ノ富源ヲ塵芥中ニ委  
シ去ルモノナルノミナラズ亦タ稅其者ノ性質ト相容レサ  
ルモノナリ一利ヲ得シカ為メニ百害ヲ忍ブモノナリ經濟  
上ヨリ見ルモ政治上法律上ヨリ推スモ又永久ノ治國方針  
トシテ一時應變ノ術策トシテモ吾人ハ毫モ其可ナル所以ヲ  
知ラズ故ニ政府這般ノ計畫ニ付テハ絶対的ニ反對セサル一カラス



明治三十一年十月

大坂砂糖商組合

上京委員

伊藤茂七

香野藏治

坂神洋糖引取商

上京委員

糖業會社

下田太三郎

京都砂糖商

上京委員

熊谷得之助

明治二十二年十月

大坂砂糖商組合  
上京委實

伊藤茂  
香野藏

坂神洋糖引取會  
上京委實  
糖業會社

大坂

